七月 自主公演番組

能

賀茂

後シテ連・天女 狩野祐一
前シテ連・里女 髙林昌司
後シテ・別雷神 前シテ・里女 髙林呻二
ワキ・神職 大日方寛
ワキ連・従者 舘田善博
ワキ連・従者 野口能弘
アイ・賀茂明神の末社 飯田豪
後見 香川靖嗣 松井彬
地謡 谷友矩 粟谷充雄 友枝真也 狩野了一 大島輝久 中村邦生 佐藤寛泰 友枝雄人
大鼓 柿原孝則 小鼓 飯冨孔明 太鼓 小寺真佐人 笛 杉信太朗

狂言

栗焼

シテ・太郎冠者 野村万作
アド・主 野村裕基

休憩（二十分）

能

夕顔

後シテ・夕顔の上の霊 前シテ・女 塩津圭介
ワキ・旅僧 村瀬提
アイ・五条辺の者 中村修一
後見 塩津哲生 谷大作
地謡 髙林昌司 佐藤陽 友枝真也 谷友矩 金子敬一郎 長島茂 内田成信
大鼓 柿原光博 小鼓 幸信吾 笛 一噌隆之

休憩（十分）

能

綾鼓

シテ連・女御 前シテ・庭掃きの老人 粟谷浩之
後シテ・前同人の霊 大村定
ワキ・臣下 宝生常三
アイ・臣下の従者 内藤連
後見 友枝昭世 内田安信
地謡 金子敬一郎 佐藤陽 佐々木多門 佐藤寛泰 長島茂 狩野祐一 出雲康雅 大島輝久
大鼓 佃良勝 小鼓 曽和正博 太鼓 大川典良 笛 小野寺竜一

附祝言

終了予定時刻 十七時十五分頃

賀茂（かも）

播州室の明神に仕える神職が都の賀茂社に参詣する。川辺に白羽の矢をたて注連縄を張った壇を見つけ、水汲みに来た里女に謂れを尋ねると、この矢はご神体であると言う。その謂れは、昔この賀茂の里に住む秦氏の娘が川で神に捧げる水を汲んでいると、白羽の矢が一つ流れて来て水桶に止まった。拾い上げて家の軒に挿しておいたところ、夫がいないのに女は身籠り、男子を産んだという。男子が三歳になったとき、人々が父を尋ねると、男子は一座の誰も指さずに軒に挿してある矢を指した。矢はたちまち雷となり天に昇って去った。別雷神がこれであり、その母子もまた神として祀られている。と語り、水を汲むと、自分は実は神であることを仄めかし姿を消す。〈中入〉
神職の前に御祖神が天女の姿で現れ舞を舞い、別雷神は雷神の姿で現れ、五穀成就を祈り国土を守る神威を示すと、天上へと帰ってゆくのだった。
（約九十分）

栗焼（くりやき）

知人から見事な栗を貰ったので、大勢の客に振る舞おうと思って、太郎冠者に栗焼きを命ずる。数を間違えぬように気を付けて焼くように命ぜられた太郎冠者は、台所で丁寧に栗を焼き始める。焼くうちにいかにも美味しそうな香りが漂い、つい一つを食べてしまう。一つ食べるとあまりの美味しさに二つ三つと止まらなくなり、とうとう全部食べてしまう。主人への言い訳の面白さもあるが、何よりも栗の弾ける有様や、焼きたての熱い皮をむく有様などを、言い回しで語る狂言独特の話術の醍醐味が、存分に楽しめる曲である。
（約三十分）

夕顔（いうがお）

豊後国から旅を続けていた僧が都の五条辺りを通ると、あずまやから女の歌声が聞こえる。僧が声をかけると女は、ここは源氏物語に書かれた「何某の院」であるという。更に女は、夕顔と光源氏が結ばれた時のことから、何某の院に泊まった夜に夕顔が物怪に憑かれて亡くなってしまったことを語り、姿を消す。〈中入〉
僧が読経をして弔っていると、夕顔の霊が現れて、恋に落ちて心を奪われたこの迷いを晴らしてほしいと僧に頼み、昔を思い出して舞を舞うと、妄執を離れて成仏できることを喜び消え去るのであった。
（約九十五分）

綾鼓（あやのつづみ）

筑前国木の丸御殿の庭掃きの老人が、女御の姿を垣間見て恋慕の情を抱く。それを聞いた女御は不憫に思い、臣下を通して「池辺の木に掛けた鼓を打って、その鼓の声が皇居に聞こえればもう一度姿を見せよう」と告げる。老人は喜び鼓を打つが、通常と異なり「綾」が張られたその鼓は音が出ない。なぶられた老人は、嘆き悲しみ、池に身を投じて恨み死ぬ。〈中入〉
その噂を聞いた臣下が女御へ伝える。池のほとりへ赴いた女御の前に老人の怨霊が現れ、恨みを述べ綾の鼓を打てと責め立てる。逃げ惑い岸辺に伏した女御に未だ恨みを残したまま、老人の霊は音もなく消えてゆくのだった。
（約七十分）

令和六年 八月 自主公演番組予告

令和六年 八月十八日（日）正午始
●会場 観世能楽堂
●前売券販売中

歌占 塩津哲生
玉葛 佐藤陽
紅葉狩 内田成信